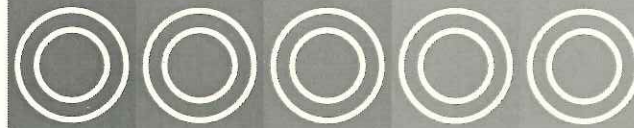


創世ホール通信 No. 258

催し案内 + 文化ジャーナル
2016年7月1日発行 ■北島町立図書館・創世ホール
電話088・698・1100◎ファクシミリ088・698・1180
771-0207◎徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91◎



坂田明グループ (梵人譚)

ライブ・イン 徳島

7月6日(水) 19時～

会場●3階多目的ホール

入場料●前売/大学生・一般2500円、小中高2000円(当日各500円増)

出演●坂田明グループ(梵人譚=ばんじんたん/坂田明 [サクソ、クラリネット、ヴォイス]、ジョヴァンニ・ディ・ドメニコ [ピアノ]、山本達久 [ドラムス]、ジム・オルーク [ベース])

主催●坂田明グループ(梵人譚)◎ライブ・イン徳島実行委員会 (☎088・698・1100)

■世界に轟く天才的サクソ奏者・坂田明が、またもや新グループを率いて2年ぶり5度目の北島町降臨! これはもはや奇跡なり
■豪放磊落◎疾風怒濤◎抱腹絶倒◎驚天動地◎人柄最高◎感動必至
■ジム・オルークはマルチ・アーティストで近年は日本在住。坂田明との共演多数。ヘルツォークや若松孝二作品の映画音楽、ソニック・ユースでの活動歴、ウィルコのプロデュースによる2004年グラミー賞受賞などで知られる大物で、徳島初上陸■全ての愛好家は、まなじりを決して創世ホールに結集せよ!



日野皓正ライブ2016

7月13日(水) 19時～

会場●3階多目的ホール

入場料●前売/大学生・一般5000円、小中高3000円(当日各500円増)

出演●日野皓正クインテット(日野皓正 [トランペット]、加藤一平 [ギター]、石井彰 [ピアノ]、杉本智和 [ベース]、石若駿 [ドラムス])

主催●日野皓正LIVE2016実行委員会 (田淵☎088・689・1227)

■世界ジャズ界の最高峰・日野皓正が2010年2012年に続き、創世ホールに3度目の登場! チケットは過去2回同様、早期に売り切れが予想されます・早めにお求めください。

熱い
創世ホールの一晩!
あの感動を再び!!

出演: 日野皓正クインテット
日野皓正 (tp)
加藤一平 (gt)
石井彰 (pf)
杉本智和 (b)
石若駿 (ds)

日野皓正 LIVE 2016
2016.7.13 WED. 北島町創世ホール

開場: 18:30 開演: 19:00 ●チケット: 一般¥5,000(当日¥500up) / 高校生以下¥3,000(当日¥500up) 全席自由席
主催: 日野皓正 LIVE 2016 実行委員会 共催: 北島町立創世ホール 後援: 徳島新聞社 お問い合わせ: 北島町立創世ホール TEL: 088-698-1100 事務局 TEL: 088-689-1227

人形劇団べんべろべえ

なかないで にんじんちゃん

7月7日(木) 11時～

会場●2階ハイビジョン・シアター

内容●「なかないで にんじんちゃん」

対象●未就学児もOKです。2歳ぐらいから楽しめます。

主催●人形劇団べんべろべえ(兵頭☎088・698・6652)

■北島町内の主婦が作ったアマチュア人形劇団べんべろべえの公演です。事前申し込み不要です。多数ご参集下さい。

夏休みビデオ上映会

「チップとデール～リスのいたずら合戦」

7月26日(火) 14時～

会場●2階ハイビジョン・シアター 無料

内容●「チップとデール～リスのいたずら合戦」

主催●北島町立図書館 (☎088・698・1100)

徳島クリエイターズマーケット⑳

7月30日(土) - 31日(日) 10時～17時

会場●2階ギャラリー

*最終日は16時迄

主催●徳島クリエイターズマーケット事務局 (川久保☎080・4034・1090)

■凄腕の「モノ作り人」達が集うマーケットの記念すべき20回目の催しです。本町在住のハンドメイド作家・川久保貴美子さんが呼びかけて実現。川久保さんは、新聞・テレビ・ラジオ等で話題沸騰の脱力系癒しキャラ《ししゃもネコ》を造形した作家です。ご注目を。



■昔の戦争では、勝った国の兵隊が負けた国に乗り込んで、略奪や殺りくや暴行の限りを尽くすのは当たり前で、もちろん女性はレイプの対象になりました。それで十三の奥さんは死を決意したわけなんですけど、そういうことはないということがわかってきました。

■それで、戦争が終わって乱歩がまず何を考えたかという、探偵小説のことでした。当時、乱歩は栄養失調から病気になって、寝込んでしまっていたんですけど、自伝には《その病床で、私は探偵小説はすぐに復活すると考えた》とあります。早くも探偵小説のことを考えていたわけです。探偵小説というのは西洋から入ってきたものですから、いわば敵性国家の文化であり、戦争中には読んだり書いたりすることができませんでしたし、海外から新作が入って来ることでもありませんでした。

■けれども、戦争が終わったんだから、じきにまた探偵小説を読んだり書いたりできる時代が訪れるだろう、探偵小説はすぐ復活するだろうと乱歩は考えました。日本は戦争に負けて戦勝国に占領されることになりませんが、占領国はアメリカであって、アメリカはなにしろ探偵小説の本場ですから、探偵小説はすぐに復活するであろうと、乱歩はそんなふうに予想したわけです。そしてその予想どおり、戦後の日本には探偵小説の全盛時代が訪れました。

■ところが、そうやって探偵小説の時代が始まってみると、乱歩と十三の間に感情的な対立が生じてきました。それまでは、探偵小説観の相違はあっても、ずっと仲が良かったんですけども、自由に探偵小説を読み書きできる時代になって、二人は対立してしまうことになります。その原因はやはり、戦争がもたらした精神的なこわばりのようなものだったといえると思います。そういう意味では戦後になってもなお、二人は戦争の影を引きずっていたわけです。

■まず、乱歩はどんな風に戦争の影を引きずっていたのか。資料をご覧ください。「グルーサムとセンジュアリティ」という乱歩の文章を引用してあります。グルーサムというのは、ぞっとするほど気味の悪い、恐ろしいことという意味、センジュアリティは性的で官能的なという意味です。昭和21年、乱歩が戦後間もなしに発表した随筆ですが、読んでみます。

■《戦争前「エロ・グロ」という言葉が流行し、私の探偵小説もその代表的なるものの一つとして、心ある向きより非難攻撃をあびせられていた。私は必ずしも態と時流に迎合したわけではないが、少なくとも、子供なども読む程度の低い大衆娯楽雑誌にセンジュアルかつグルーサムな探偵小説を書いたことは非常にいけなかったと悔やんでいる。今後はそういうあやまちを再び繰り返さないつもりである。》

■昭和初年、エロ・グロ・ナンセンスという時代風潮に共鳴するように、乱歩の長編小説が書かれ、多くの読者に受け入れられて、人気を集めました。しかしそれは、必ずしもわざと時流に迎合していたわけではないんだと、乱歩は書いています。たしかに乱歩の作品を特徴づけているのは、乱歩という作家の資質や体質から生み出されたものであって、それがたまたま時代風潮と合致したせいで人気作家になったわけですから、乱歩には迎合して書いたという意識はなかっただろうと思われれます。

■それで、《子供なども読む程度の低い大衆娯楽雑誌》というのは、『講談倶楽部』や『キング』なんかの小説を主体にした月刊誌で、乱歩はそこに《センジュアルかつグルーサムな》小説、つまり若くて美しい女性が裸にされて殺されたりするような、恐怖や怪奇を前面に押し出した探偵小説を書いたことを《非常にいけなかったと悔やんでいる》《今後はそういうあやまちを再び繰り返さないつもりである》ということですけど、つまり乱歩には、こういう風に言うしかなかったわけなんです。謝らないと戦後が始まらない。昔の私は悪うございましたと謝罪を済ませなければ、新しい時代に進めない。乱歩はそういう立場に立っていました。

■「探偵小説の方向」という乱歩の文章を読んでみます。《戦争中人々は西洋の没落を説き、合理主義を蔑視し、東洋の直感主義を謳歌した》と乱歩は述べています。乱歩は戦前、日本人はあまり探偵小説向きではない、論理的ではない、科学的ではない、合理的ではない、そういうところで書かれた探偵小説がどうしても本格から離れて変格として隆盛してゆくのは仕方がないことである、当然のことであると書いておりました。日本の探偵小説が独自の進化をとげてガラパゴス化していたことを、全面的に肯定していたわけです。しかし戦後は一転して、変格作品を否定し始めます。

■《直感主義は西洋の合理主義、科学主義の前に敗れ去ったのである。われわれは今深い反省途上にある。》と乱歩は書いています。戦争に負けたのは、科学や合理を馬鹿にしていたからである、と指摘して、戦争だけでなく探偵小説でも、日本独自の探偵小説というのは実は間違っていたんだと断定しています。

■では、どんな探偵小説が正しいのか。《戦前には見られなかったほどの勢で探偵小説が要望されている。しかも所謂変格ものではなくて純推理小説への要望である。この嗜好の変化と探偵雑誌の非常な売れ行きは、論理小説の前途に大きな希望を抱かせるものである。》

■今まで日本で盛んに書かれていた変格ものは、むしろ脇において、あくまでも本格探偵小説がメインになるべきである。乱歩はそう書いておられます。《私はこのごろ無名新人の原稿を見る機会が多いのであるが、そういう作品の大多数が純推理小説を目ざしている。その中には従来見られなかったような優れた作も散見し、近い将来には少なからぬ新人が世に出るのではないかと期待される。(略)一層期待されるのは有力な新人の出現である。日本探偵小説を革命するがごとき新人の擡頭(たいとう)である。》

■戦前のような変格作品ではなく、謎解きを主眼とした本格探偵小説を書く若い人がたくさん出てきた。戦争に負けたあと、科学や合理を馬鹿にしていた人たちを押しよけるようにして、若い人たちが論理や合理を重んじた探偵小説を書き始めている。今ようやく、論

理探偵小説の黎明が訪れているのである。乱歩はそんな風を書いておられます。戦争が終わって、そういう時代が始まっていたわけです。本格作品だけが唯一絶対の至上のもので、変格はもう必要ないといったような、戦前の主張とはまったく正反対のことを、乱歩はずいぶん硬直した、こわばったような文章で強調していますが、乱歩が硬直しているのも無理のないところで、戦後というのは戦前の指導者層が画一的に否定され、非難され、場合によっては処罰されていた時代でした。旧時代のリーダーを処分することが、新しい時代を始めるための前提のひとつでした。

■乱歩は、誰もが認めていたとおり、戦前の探偵小説界のリーダーでした。しかも、探偵小説をエログロという間違った方向に導いたのは乱歩であると、その点でも衆目が一致していました。本格であるべき探偵小説を変格に導き、エログロに貶めてしまった、とんでもない間違いを犯してしまったリーダーであったと、いまや乱歩はそういう立場に立たされていました。

■ですから戦後の乱歩は、まず反省し、謝罪することから始めなければなりません。私は悔やんでおられますと、もう過ちは繰り返しませんからと、そういう風に宣言することでしか、乱歩は戦後という時代を始めることができませんでした。そうすることでようやく、乱歩は戦前から引き続いて探偵小説界のリーダーとして君臨することができたわけです。つまり日本の探偵小説は、論理探偵小説こそが至高のものであるというような、いってみれば本格至上主義をリーダーみずから明確に宣言することで、戦後という新しい時代に第一歩を踏み出すことになりました。

■しかし、乱歩のそうした豹変を快く思わない人間が存在しておりました。海野十三です。十三はかなり本気で怒っていたみたいです。本格至上主義に真っ向から異を唱え、仲の良かった乱歩にも遠慮なく噛みついていました。資料にある海野十三の「探偵小説雑感」をご覧ください。

■この文章はたぶん『海野十三全集』にも収録されていないんですけども、とても貴重で重要なものですから、この資料には全文掲載してあります。大変な値打ちのものであるということをご承知おきいただきたいと思いますが、ちょっと読んでみましょう。

■《探偵小説論に、各人各説あるは結構だ。(略)本格探偵小説を尊敬するのは結構だが、面白くない本格探偵小説は一向結構でない。そのやうな作品ばかり読まされては、たまったものじゃない。そういう風潮を本気で薦めている者があるとしたら、それは探偵小説というものを見誤っているものだらう。》

■実名は出していませんけれども、本格一辺倒の風潮を押し進めている人間というのは明らかに乱歩のことです。十三はここで、戦前から引き続いて、本格はいいけれども変格もいいではないか、要は面白いことである、面白ければそれでいいのであると、戦前にも戦後にもぶれることのない探偵小説観を披歴しておられます。しかも《立派な本格探偵小説なんて、探偵作家と名乗る者の何パーセントが書き得るやら、とにかく稀である。またそれを書き得る作家にしても、立派なる本格ものは、一生涯を通じて一作あるかなしかである。》とも書いておられますが、これもおそらく正しい指摘で、本格の傑作となると1年に1作ずつ書けるというようなものはありません。(次号に続く)